

をのがじゝに散りければ 慘撃受けしアスコリッド

われも力の限りにと 上海港に逃げ込むや

船渠に入りて圖々しくも 修理を爲すとして出て來ず

支那の無力を侮りて 中立權を無視せしが

かさねし數度の交渉に 漸く武裝解除せり

恥かきざらす様見よや。

あー愍然!!

林天然

俺が隣の美伊ちやんは

今年十二の少女で

腕白盛りの頃なれど

目はみえないし慈母はなく

便るはかばそい杖一ツ

何うして此世を渡るだらう

此世は浮世じや暗の世じや

荊あり蛇あり鬼もある。

愍然や彼の子美以ちやんは

今頃何處で何をしてる

家内では怒鳴られ叩かれて

家外では他兒に馬鹿にされ

たつ瀬がないので泣いてゐる

たゝせてやれな背を撫で、

見えねど涙が目に餘る

手々ひいてやれな善い道に。

フレール會併句端書集

一、課題 新年雜 一人十句以下

一、〆切 十一月二十五日限り

一、披露 明治卅八年一月發行本誌文苑欄

一、賞品 天地人三座には美景を呈す

一、撰者 當分本會の撰とす

一、投稿 本誌購讀者は何人にてても投吟するを

得用紙は繪葉書に限り(眞筆刷物隨意

住所氏名雅號を明記し必らず左の宛

にて送らるべし。

埼玉縣入間郡芳野村

フレイベル會俳句掛

鹽野奇零宛

第四回俳句端書集

知らぬ子も抱て見せたる花火哉 小石川區 平岩學洋

暮てよき家となりけり月の萩 同

亡き人の遺髪届きぬ秋の暮上 總前田幸作

露散りて氣高き菊の薫り哉 琦 玉青葉尹人

道問へば案山子なりけり秋の暮 同

常盤木の中に目立つや夕紅葉 武 藏 芦田水山

蔦這ふた蕉翁の碑や蔓珠沙華 琦 玉高歳子

秋風に故郷偲ぶ露營かな 東 京 松の舎

こほろぎや聲も細りて月五更 同

見るものに聞く者に唯秋の暮 本所區 久米辰子

姉はもう他家の人なり後の雛 同

霧深く海賊船を逸しけり 同

澁柿やまゐる三年の恩知らず 同

屠所に行く牛の歩行や秋の暮 同

新蕎麥や塗り直したる根來椀 仙 台 立花一瓢

花譽めた山から先や初紅葉 同

鍬洗ふ流れも枯れて冬隣 同

一と群は社の森や渡鳥 同

切々の雲縫行くや渡鳥 同

初秋や枕にも知る朝の冷羽 前門地一樂

明月や千歳を經たる松の上 同

寄合ふて印つけゝり種ふくべ 同

猫の來て愛想添へけり秋の雨尾 張田中松窓

立つ鳴の行方見送る繩手かな上 織川上九如

雨に減り風に減り行く殘暑かな 神田區美惠子

月に目を閉ぢて虫聞く一人かな 丹 波金子松仙

出家して心閑なり月今霄 瑛 玉會田松聲

朝霧や渡船に近き馬の聲 武 藏山下柳勝

鳴啼くや夕日の落て越す渡船 眞水庵

月は江に残りて寒し遠水札京 郡 本多芙蓉

何もなき小庭の隅や鶏頭花 同

心まで晴て月見る今霄哉 月田一甫

目さばりのなくて澄けり秋の山 同

道聞くに又も尾花の一里かな 江面庵富實

戰捷の前兆ならめ稻の出來 戸田一豊

三光

陣中の明月

天、故郷の眺めもさぞな月今霄 東京松の舎

地、捕虜となりて囹圄に虫を聞く夜 武藏内藤紫雲

人、朝寒や霄の湯下駄のぬれたまゝ、 上織前田幸作

追 加 無一庵奇零

鳴交す虫のいくさや戰爭あゝと

力なき秋の夕日や蕎麥の花

汲交す盃冷えて秋の雨

松葉焚く陣所の烟や秋の暮

啼く虫に君歸り來ぬ便りかな

高ふ澄む露營の月や雁の聲